

# できるだけ自分のことは自分でする子

山根純子

## はじめに

F子は、学校生活のほとんどの時間、下をむいていたり一人でじっと座っていることが多く、他と関わりを持つようとする場面があまり見られない。毎日繰り返される着替え、給食などパターン化された移動は一人でできるが、それ以外の移動は全体への指示だけではできず、個別の声かけが必要である。強く促されなければ言葉を発することも難しく、ことばもはっきりと聞き取れない。しかし、自分がその気になった時は、大きい声で分かるように言える場合もあることから、F子の持病である若年性リウマチによる関節の痛みのために、自分から話したり動いたりするのがおっくうになり、言わず動かずに態度が習慣化したと考えられる。また、言わなくても、動かなくても回りの者が容認してきたことも原因のひとつになっていると思われる。しかし、作業には持続して取り組むことができ、個別に指示をすれば移動したり、挨拶、返事ができる。自分の力でできるだけ個別の指示なしで、動けるようにと願って実践したことについて述べる。

## 1. プロフィール

### (1) 生育歴

- ・昭和51年9月12日生。17歳4カ月の女子。高等部2年。
- ・1歳時にダウン症と診断。また、肺出血のため、2カ月半入院。以後何回か入退院を繰り返す。
- ・保育園に1年半通園。昭和58年本校入学（小学部1年）。昭和59年に若年性リウマチと診断。昭和61年、病気療養のためT養護学校へ転校。昭和63年9月本校の小学部6年に転入。

### (2) 諸検査による実態（平成5年5月実施）

- ・知能検査 WISC-R IQ40以下 言語性IQ45以下、動作性IQ40以下
- ・S-M社会生活能力検査 社会生活年齢…3歳11カ月 社会生活指数…30  
自己統制…5歳8カ月 身辺自立…4歳4カ月  
移動…4歳5カ月 集団参加…3歳1カ月  
作業…4歳5カ月 意志交換…2歳10カ月

### (3) 行動特性

- ・リウマチを理由にして、許されてきた事がらが多く、受け身的な態度が身についている。
- ・常に下をむいているため、話し手を意識できない。
- ・語彙が少なく発音も不明瞭で声も小さい。
- ・限定された作業であれば持続できるが、言葉での指示内容を理解するのは難しい。

## 2. 取り組みの構想

### (1) 指導仮説

個人目標 できるだけ自分のことは自分でする子

- つきたい力
- ・ 相手を意識して、集中して聞こうとする。
  - ・ 人との関わりを持ち、自分の気持ちが言える。
  - ・ 自分の病気を意識して、進んで体を動かす。

#### コミュニケーションに視点をあてた取り組み

##### コミュニケーションの目標

相手を意識して話を聞き、意志表示できる子

仮説 話をする相手を意識しない点が、コミュニケーションする時の一つの問題点である。下を向いた状態で話を聞く状態が多く、相手を意識できず発言も少ない。これはリウマチのために手足の関節に痛みがあり、話したり動いたりするのがおっくうなこと、話さなくても、他の人と共に行動しなくても他者が許してきたこと、この二つの理由が考えられる。そこで、指導者はリウマチのために動けないのかそうでないのかをしっかりと見極めたうえで、常に他の生徒と同じ活動をするを要求していけば、他との関わり合いが増えるものと考えた。それによって、じっとしている場面が減少し、下をむいていることも少なくなると考えた。

また、挨拶、返事の声をしっかり出させることにより相手への意識が高められ、意志表示もできると考え挨拶、返事の場面を意図して多く設定した。

#### その他の取り組み

- ・ 朝の活動でしっかり体の関節を動かし、汗ばむくらい歩かせる。
- ・ 音楽では、一人でも歌えるようにさせ、みんなの前で歌わせて、自信を持たせる。
- ・ 連絡ノートにより、学校での様子、家での様子医療面での変化などを互いに連絡し合いながら、無理のないように指導にあたる。

### (2) 指導方針

特に異常がない限りは、特別扱いをせず、学級集団の中で他の生徒と同じように活動させることで学級を意識させていきたい。また、学習の始めと終わりの挨拶、返事などが出来ていない時にはやり直しをさせ、しっかり声を出させる。また、全体への指示をしっかり聞くように意識づけたいので、個別に指示を出す場面は作らない。指導者が症状を正しく把握し、病気に逃げ込まないように配慮する。特に課題学習では、長期間、リウマチの痛みを軽減する方法についての学習を継続すると共に、日常生活の指導の中でも進んで体を動かすように指導していきたい。

### 3. 挨拶と返事の指導の実際

#### (1) 日常生活場面での実践

##### ① ねらい

- ・挨拶や返事をする場面を多く体験させ、自信をつけさせることにより主体性を持たせる。
- ・相手を意識して聞こうとする態度を育成する。

##### ② 実践例

###### a 朝の挨拶

###### ・初めの実態

下をむきながら廊下を歩き、誰とすれちがっても声をかけられない限り、黙って教室に入っていた。挨拶をすることが5月の児童生徒会の目標としても取り上げられたので、学級全体へも挨拶についての指導を行った。しかし、F子については変化が見られなかった。教師が声をかけても、下を向いたまま小さい声で「おはよう。」という程度であった。

###### ・指導方針と手だて

二学期の現場実習の前に、実習先の人には声をかけられる前に自分の方から挨拶をすることが大事であると指導し、玄関に入る時、廊下で先生や友達に会った時、教室に入る時に必ず、「おはようございます。」と言う約束をし、声を出す場面を増やした。

###### ・変容

F子が挨拶をしないで入室をした時、「おはようございますを言わなかったから、もう一度入り直しをしましょう。」と言うと、下を向いたまま小声で「おはよ、ごじゃます。」と言い「もっと大きな声で」と言う、顔を上げて教師を見て少し大きい声で言えた。このような声かけを繰り返すうちに、現場実習直前には、入室時に大きい声で自分から挨拶が言えるようになった。しかし、その他の場面での変容は見られなかった。

###### b 返事

###### ・初めの実態

朝の会で出席を確認する際、下を向いたまま小さい声で返事をしていった。上を向くように促すと、相手の顔を見て返事ができた。用があって名前を呼ばれても下を向いたままのことが多く強く促されないと返事が出来なかった。1対1で話す時は、うなづくだけのことが多く、返事をするように促すと、「うん。」と返事をした。「返事は、はいです。」と言われてやっと、「はい。」と言えた。

###### ・方針と手だて

返事をする場面では、しなかったり、下を向いたり「うん。」と言った時は、「顔を上げて。うんではなく、はいです。もっと大きな声で。」とその都度必ず声かけをする。

持ち物の確認を一つひとつゆっくりと質問をして、各品物毎に返事をする場面を設定するなど返事をせざるをえない場面を増やす。

## ・変容

現場実習の頃より、朝の会や、用事がある時、確認を求めた時などに、相手の顔を見て返事をするのが、少しずつではあるが出来るようになってきた。

## (2) 生活一般での実践

### ① ねらい

- ・学級集団や社会との関わりを積極的に持とうとする態度を育成する。
- ・誰にでも、主体的に挨拶をしようとする意欲を育てる。

### ② 実践例

#### ・初めの実態

学習の初めと終わりの挨拶をする時、下を向いたまま黙ってお辞儀だけしていた。級友が座るのに少し遅れて下を向いたまま座っていた。声を出さなくても済まされることが多かった。

#### ・方針と手だて

挨拶を大きな声で言ってから学習を始めることを約束し、全体で挨拶する時にも必ず声が出ているか確認し、聞こえない場合には、言い直しをさせた。

また、近隣の施設に奉仕活動をする単元を設定し、多くの人たちと触れ合い、挨拶を交わす場面を取り入れた。同じく、地域の人と関わりがもてる牛乳パックを回収する学習の中でも挨拶する場面を意図して取り入れた。

## ・変容

学習の初めと終わりの挨拶は、促されると顔を見て言えるようになった。奉仕活動の場面でも「顔は。」という簡単な声かけだけで、相手の顔を見て挨拶ができるようになった。しかし、牛乳パック回収についてのチラシ配りの時には、声を出して挨拶ができず、下を向いたままであった。

## 4. 考察および今後の課題

F子は、2学期の現場実習のあたりから、少しずつではあるが変わってきている。しっかりした声が出るようになり、それに伴って相手を見て返事や挨拶が徐々にできるようになっている。しかし、促されてする場面がまだ多いので、定着するまで継続指導が必要である。

話を聞く時、下を向いていることが多く、指示が他人ごとになってしまい、指示の内容が理解できない。そのため、指導者が1対1で顔を無理にあげさせ、個別に指導する場面が多くなってしま

い、学級集団と関わる機会を少なくしたことは大きな反省材料である。また、現場実習を境にして人との関わりに変容が見られたことから、今、F子が持っている未熟なコミュニケーションの力であっても、関わる集団を拡大し、多くの生きた経験をさせることが今後の課題であると考えている。



挨拶するF子